

今日における伝道の指針

2010年10月 日本キリスト教会大会伝道局

伝道に閉塞感のある今、わたしたちは、わたしたちの教会が主イエス・キリストによって建てられている意味を改めて問うとともに、現代における伝道の課題に喜びをもって取り組むためにこの指針を提示いたします。

神の国の宣教に仕えるわたしたちの教会が、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい」(テモテニ4章2節)という主の貴いご委託にお応えするために、御言葉そのものに聴きつつ共に考え、祈り、励みたいと願います。

1. 日本キリスト教会の志と伝道

わたしたちが、伝道の使命と課題に明確な目標を持って取り組むために、日本キリスト教会が新しく設立された経緯とその志をまず確認したいと思います。

(1) 日本キリスト教会設立の志

敗戦に伴い宗教団体法が廃止されて後、かつて旧日本基督教会に属していた多くの者が日本基督教団内において会派制を主張しましたが、教団総会において否決されました。1951(昭和26)年、その中から真実な教会形成を志した者たちが離脱し、北海道・東京・近畿の3中会・39教会をもって日本キリスト教会(当時、日本基督教会)を設立し、1953(昭和28)年に九州中会が加わりました。

日本キリスト教会設立の主な理由は、①国家権力などに起因しない、教会の真実な一致と決断による教会を建設するため、②旧日本基督教会の名称・信仰告白・憲法規則を継承しつつ、悔い改めをもって長老・改革派の神学によるキリストの教会を建てて行くため、③国家および外国の教会との関係において自主独立の伝道と教会形成を行うため、でありました。

設立から60年、その志のもとに結集した教会に、いくつもの群れが加えられて来ました。そして、今、信仰告白共同体としての一致が厳しく問われている中で、わたしたちの教会は、公同の使徒的教会のつながりを持ちつつ、その志を一層豊かに展開する使命を担っています。

(2) 一つ信仰告白による伝道と教会形成

日本キリスト教会設立の当初、「信仰告白なくして教会なし」という言葉が旗印のように掲げられました。それは、主イエス・キリストによってのみ立つ信仰において、教会の公同性と独立性を保ちつつ、教会を建てて行くことを意味します。日本キリスト教会は、一つ信仰告白に立って、伝道と教会形成の使命を果たすために建てられたのであります。

それを具現化するために、信仰告白・憲法・規則の制定と改正、神学校の設立と運営、諸委員会の設置と運営を行うとともに、日曜学校をはじめとした信仰教育と伝道の推進をはかり、各個教会と中会および大会は、それぞれの自主性を重んじながら伝道のために協力して来ました。また、負の遺産としてある神社参拝問題や在内地朝鮮基督教会(現、在日大韓基督教会)併合についての罪の告白と謝罪を行い、今日も信仰告白の闘いを続けています。

人間的なよしみや信頼だけでは教会は建ちません。教会の一致も、それに基づく伝道の推進も、また制度を生かすことも危うくなります。その意味で、信仰告白と伝道、教会形成は分かちがたく結びついています。伝道者不足の問題や信仰の継承に欠けを抱える今こそ、終わりの日に備える教会としての真価が問われていることをおぼえ、一層固く一つ信仰告白に立ちたいと願います。

「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」(エフェソの信徒への手紙4章2～3節)。

2. 今日の伝道の課題と指針

イエス・キリストの福音を宣教する教会は、それぞれの時代と地域において、伝道の普遍的あるいは固有の課題と取り組んで来ました。そして今日、教会は、地域や時代が抱える問題と教会そのものの課題に直面しています。

わたしたちは今、そうした現実に向き合う中で、御言葉そのものに聴き従いながら伝道の使命を果たして行きたいと思えます。

(1) 多くの宗教の中で

世界には多様な宗教が存在し、国際関係などに強い影響を及ぼしていることが注目されています。キリスト教も、戦争や紛争の背景の一つとして、他の宗教との関連で着目されがちです。日本においては、一部宗教の反社会的行為もあって、「宗教は怖い」とか「日本古来の宗教以外は不可解」というイメージを抱く人も少なくありません。それに伴い、八百万の神々を信奉することの妥当性を主張する向きもあり、国の内外を問わず、キリスト教に対する評価は低められている感があります。

確かに、地上の教会は「世にある途上の教会」であり、歴史的存在として罪や破れを抱えています。その点で、他の諸宗教や諸文化とも関わりをもっています。

しかし、人間の文明そのものが、それを超えた神の言葉を必要としていることは明らかです。神は、まことの神の言葉すなわち福音を教会に与え、それを宣べ伝える使命を託しておられます。教会は、終わりの日のできごとの先取りとして、神の民の群れとしてこの世に建てられているのです。

わたしたちは、単に自己保存のためではなく、主イエス・キリストの愛から、神が支配する世界へと遣わされて行きます（ヨハネ福音書

21章15節以下）。

「この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」（使徒言行録4章11～12節）。

(2) 現代社会において

科学技術の急激な発達、快適で豊かな生活をもたらしました。それに伴い、神を畏れ、死を恐れることよりも、人間の知恵や力によって生を謳歌しようとする傾向にあります。その結果、行き過ぎた個人主義、欲望の充足を際限なく求めようとする消費社会、現世利益へ終始する精神性がもたらされました。しかし、期待していたものとは裏腹に、現代社会においては、生きる意味が見失われるとともに人間関係が希薄になり、さまざまな破れが深刻になって来ています。

確かに、絶対者としての神について語ることも、神から聞くことも敬遠しがちな現代人にとって、「神の死」は実感としてあるのかも知れません。人類の歴史のさまざまな悲慘を見るにつけ、「神の不在」を問題にする人も少なくありません。

しかし、人間が神を見失っても、神は人間を見失いません。そうした現代人のためにも、超越者でありながら受肉し、十字架によって「死なれた神」が、まことの神を指し示しています（フィリピ2章6～11節）。わたしたちは、生きる意味を見失いがちな現代人にこそ、まことの神との出会いと、キリストにある希望と、聖霊の執り成しが必要であることを信じます。

「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。・・・”霊”自らが、言葉に表せないうめぎをもって執り成してくださるからです」（ローマの信徒への手紙8章20、26節）。

(3) 日本の精神土壌において

太平洋戦争後の日本においては、従来の価値観への疑念や精神的な欠乏感もあって、新しい価値観や生き方が模索されました。けれども、その精神土壌に本質的変化がもたらされるまでには至らず、「家」が解体されつつある中でも、また国際化が進展するに至っても、超越者で絶対者としての神を信じるキリスト教への違和感・距離感が残りました。近年では、社会や家族の絆が弱まる中で、民族的アイデンティティーを確立させるものとして新たな民族主義が唱えられる傾向にあります。それは、精神的な普遍性を見失わせ、他者との共生をはばみ、閉塞状態に陥る危険を抱え込むものでもあります。

全ての者の主であるイエス・キリストの父なる神は、日本に生きる者にとっての神でもあられます。イエス・キリストは「安心なさい。わたしだ」(マタイ 14 章 27 節)と呼びかけ、まことの神との永遠の絆へと招く方です。さらに、「わたしは満ち足りている」と言って自己完結しようとする者たちの閉ざされた心の戸を叩く方です(ヨハネ黙示録 3 章 17～20 節)。神は、キリストによってご自分との和解をなし遂げ、すべての人を神の国へ招いておられます。

わたしたちは、愛する同胞と日本に生きる人々が、主イエス・キリストによって神の国に入れられるために、この地に遣わされ、その使命を果たします。

「神がわたしたちを通して勤めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」(コリントの信徒への手紙二 5 章 20 節)。

(4) 礼拝する群れとして

今日、日本のキリスト教と教会は、全般的に自信と活力を失いつつあるように思われます。地域や時代が抱える諸問題もあって、主日礼拝厳守や祈祷会尊重の精神、キリスト者としての倫理観、伝道の使命

感はかつてより薄れてきていることは否めません。このため、社会や隣人に与える影響も弱まっている傾向にあります。その結果、日曜学校の低迷や信仰告白と受洗志願者の減少、伝道者の不足を招き、信仰の継承と今後の伝道に大きな陰りをもたらしていると考えられます。

こうしたいくつもの重い課題に取り組むために、多くの方策は要りません。何よりも、わたしたちが礼拝者として生かされ、礼拝者の群れとして形成されることです。一緒に集められて御言葉に聴き、祈り、讚美し、告白することは、神の国の喜びのできごとです。主の名によって集まるところに、主もまたその中におられます(マタイ 18 章 20 節)。その喜びによってわたしたちは押し出され、またそこへと人々を招くことができます。

礼拝と伝道は、終わりの日に備える、神の国の喜びのできごとです。主の御業によって、礼拝を真実に捧げるとき、神は、新しい心と新しい霊を与えてわたしたちを砕き、伝道のために用いてくださるはず(エゼキエル 36 章 25～32 節)。

「神の憐れみによってあなたがたに勤めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」(ローマの信徒への手紙 12 章 1 節)。

3. 伝道の使命に生きよう

イエス・キリストの福音を宣教する代々の教会は、福音そのものもつ真理と豊かさにあずかることによって、伝道の課題と取り組んで来ました。今日のわたしたちの教会も、御言葉と聖霊によって確かな方向と力を与えられて、直面する困難を乗り越えて前進することを確信します。

(1) 伝道は神の御業です。

「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちをご自身と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」。

コリントの信徒への手紙二 5章 17～18節

神の救いの歴史を辿るとき、その決定的な御意志が主イエス・キリストの出来事に明確に現されていることを知らされます。父なる神は、御子を遣わし、その十字架によってご自身との和解を成し遂げるとともに、救いに入れられたわたしたちを聖霊において用いて、その御業を遂行して行かれます。

(2) わたしたちの主は、すべての人のまことの救い主です。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病氣や悪いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、うちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」。

マタイによる福音書 9章 35～36節

現代人は、人間の知恵や技術、つかの間の慰安や消費社会に助けを求める傾向にあります。しかし、それらに人間や世界を救う究極の力はありません。人々のまことの飼い主であるイエス・キリストは、そうした現代人を「飼い主のいない羊」として深く憐れみ、救いへと招いておられます。

(3) わたしたちは、主に信仰の告白をもって応答します。

「では、何とされているのだろうか。『御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある』。これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです」。

ローマの信徒への手紙 10章 8～9節

生ける神は、歴史の各時代にわたり、またいたるところにおいて、

聖霊と御言葉によって主を信じる者の群れを起こして行かれます。その信仰告白のもとに結集させられているわたしたちもまた、一つ信仰告白へと人を招くとともに、そこからこの世へと共に遣わされてまいります。

(4) わたしたちの教会は、伝道に励みます。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしろ。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。

マタイによる福音書 28章 18～20節

伝道は、終わりの日まで続けられる主の業です。そのため、わたしたちは伝道について安易な楽観を抱きませんし、困難をいたずらに嘆きません。むしろ、この貴い御業のために主が教会を建てておられることを感謝いたします。わたしたちの教会は、主イエス・キリストを、礼拝と讃美、教育と奉仕の業によって生き生きと宣べ伝えることに励みます。